

むらたちひろは染織を「時をうつし見るための すべ(術)」と捉え、「染める／染まる」という行為・現象に着目した作品制作に取り組んでいます。

単色の濃紺の染料で端を染めて乾かした布に再び水を与えることで、染料が毛細管現象によって吸い上げられていく《時の容》。染料色素の性質の違いから、滲み上がる過程で単一に見えた「色」に内在していた多様な色彩がまるでスペクトルのような様相を浮かび上がらせます。展示作品は10月19日の朝に水を挿したもので、蔵の温度や湿度、空間に射し込む光の影響を受けながら、今もゆっくりとした変化の最中にあります。「止まっているようで、動いている」。むらたの「時」のイメージはここで「染織」に重なり、本作品では今もこの場に流れる時間の姿を色と現象に置換して顕在化させるとともに、その眼差しを異なる時が流れる蔵に向けることを促します。

2階左にあるコンクリートの空間は滞在中のむらたの制作場所であり、吊られ、立てかけられた作品《beyond : Aug.- Oct. 2020, at Yagi / Kyoto》は展示公開中にも都度に制作されています。八木を度々訪れる中で目にし、印象に残った色彩をベースとした異なる色の染料を刷毛で素早く布に引く。引かれた線、置かれた色はすぐに滲み、揺らぎ、ぶつかりながら、境界の曖昧な色面となって拡がる。この行為と現象にむらたは「布に刷毛で色を置いた瞬間から遠ざかっていく」というイメージを思うといい、現れた作品には「遠ざかるけど、ある」を見えるといいます。むらたは記憶やイメージを染織により「遠ざかり続け」させるとともに、「在り続ける」に留めることで、自身の内と外、そこに生じる距離に眼差しを向けます。

2階右にある木造の空間には、今は使われていない酒蔵のガラス窓を什器にした作品《雫 : Aug.- Oct. 2020, at Yagi / Kyoto》が点在する。むらたは八木を訪れるたびに酒蔵の中だけでなく、周囲の自然などの目にしたものを撮影している。本作品はその写真データをデジタル捺染によりプリントした布を舟型の形状に折り、そこに水を加えることでイメージは溶けて滲み、色の様相へと置換されている。それは1階の《時の容》とは逆に、写真としてイメージを構築するための配置が分解され、色の様相へと還元しているかのようでもあります。むらたはこの舟型を「容れ物」と呼びます。ここでは記憶が写真という容れ物(記録)へと移されたことで、その詳細や手触りといった像が遠ざかり、消失しようとしています。

むらたは、「水」を媒介とする染織の行為と現象に、「時(記憶)」をうつし見ようとします。その不可視の様相は色によって私たちに可視化され、そこに様々なイメージを発見させます。その眼差しは、永く「水」と「時」の流れに在って、その様相を今に残す酒蔵に重なり、いま・ここに重なるひと時を得たのではないのでしょうか。ここに重なり、ここからまた別々の流れとなる しるべ(標) となるであろう本展では、むらたの作品、あるいは酒蔵の佇まいに促され、私たちの内と外、想いや記憶へと眼と想像を向ける機会となるのではないのでしょうか。

正木裕介(ギャラリー・パルク)

〔statement〕

この場所に何度か出入りしているうちに、必要に応じて追加されたいしい棚やフックから、ここを仕事場とした人達の手つきを感じるようになりました。そして、私もここで自分の仕事をしてみたいと思うようになりました。

布に染液をふくませて、浸透するのを待ち、そこに現れるものに対峙する。

やがて水は消え、色だけが残る。

その移ろいに、「時」が受け容れるものをうつし見る。

この場所に残る気配や、伝え聞いた酒造りの記憶に触れながら、私たちの内面に残る誰かの気配や記憶の存在に想いを馳せる。

むらたちひろ

〔CV〕

むらたちひろ

Murata Chihiro

1986 京都生まれ

2011 京都市立芸術大学大学院美術研究科工芸専攻修士課程修了

主な展覧会

2020 「写真と染のまじわるころ」(染・清流館／京都)

2019 「京都府新鋭選抜展」(京都府京都文化博物館／京都) '16

2019 「染・清流展」(染・清流館／京都) '13 '15 '17

2018 個展「Internal works／境界の涉り」(Gallery PARC／京都)

2018 個展「Internal works／満ちひきは絶え間なく」(ギャラリー恵風／京都)

2018 藤原隆男 京都市立芸術大学退任

記念展「ほしをみるひと」(京都市立芸術大学Gallery@KCUA／京都)

2018 「PHO-TEX」(GALLERY GALLERY／京都)

2017 個展「Internal works／水面にしみる舟底」(ギャラリー揺／京都)

2017 未来の途中プロジェクト「その後、未来の途中」(京都工芸繊維大学美術工芸資料館／京都)

2017 未来の途中プロジェクト「未来の途中、途中の部分」(京都市立芸術大学Gallery@KCUA／京都)

2016 未来の途中プロジェクト「未来の途中のリズム」(京都工芸繊維大学美術工芸資料館／京都)

2016 ARTIST WORKSHOP@KCUA成果発表展ネリー・ン・IH「FEATHER」(京都市立芸術大学Gallery@KCUA／京都)

2015 「新鋭染色作家選抜12人展ー染めに拓くー」(染・清流館／京都)

2015 「Contemporary NOREN」(京都芸術センター／京都)

2014 個展「時を泳ぐ人」(Gallery PARC／京都)

2014 「THE GIFT BOX」ーティストが提案する特別なギフト。 (京都府京都文化博物館別館ホール／京都)

2014 「Kyoto Current 2014」(京都市美術館別館／京都)

2013 「染＋ーわたしにまつわるそのめのはなしー」(染・清流館／京都)

2012 個展「水たまりアルバム」(Gallery Ort Project／京都)

受賞

2011 京都市立芸術大学制作展奨励賞

2009 京都市立芸術大学制作展同窓会賞

展覧会評

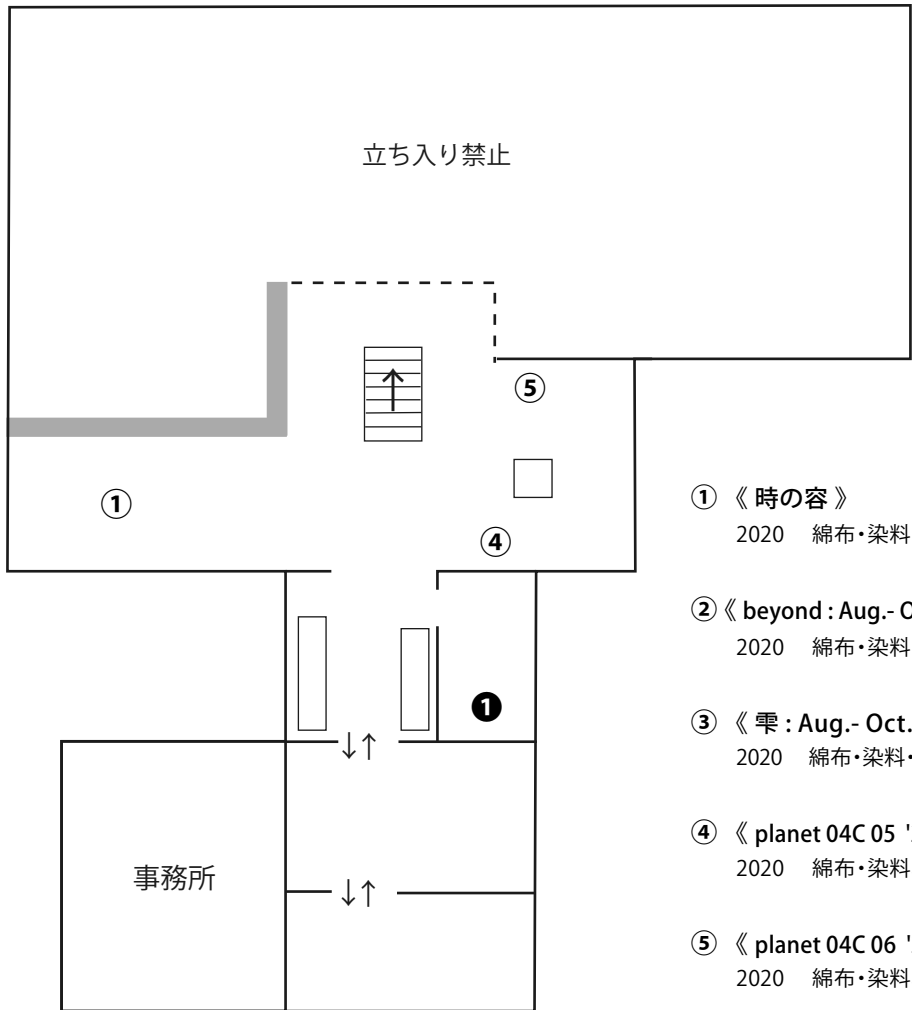
2018 高嶋慈 「artscape 2018年7月15日号」

2017 平田剛志 「染色の起源へ」ーカタログ「境界 borders / boundaries」

2017 高嶋慈 「artscape 2017年6月15日号」

〔MAP〕

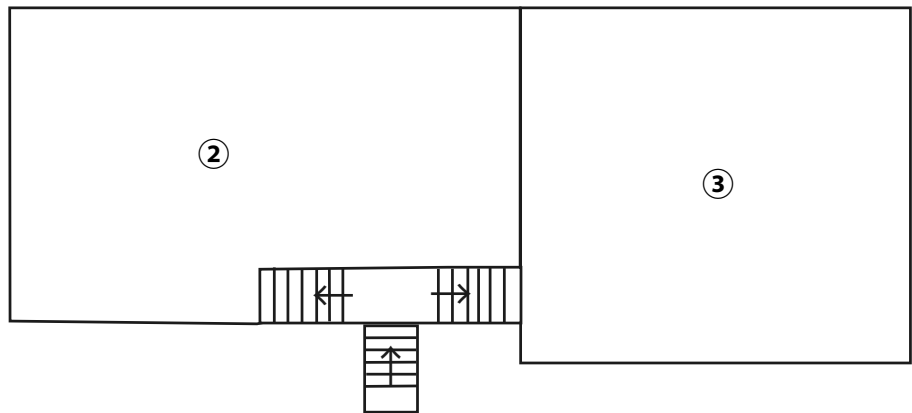
〔1階〕



- ① 《時の容》
2020 綿布・染料・水
- ② 《beyond : Aug.- Oct. 2020, at Yagi / Kyoto》
2020 綿布・染料・水
- ③ 《雫 : Aug.- Oct. 2020, at Yagi / Kyoto》
2020 綿布・染料・水、デジタル捺染応用技法
- ④ 《planet 04C 05 '20.9.28. PM 0:21 - PM 6:01》
2020 綿布・染料、HD VIDEO
- ⑤ 《planet 04C 06 '20.9.28. PM 1:06 - PM 6:08》
2020 綿布・染料、HD VIDEO

- ① 『すべとしるべ 2020 #01 [時の容] / Ver.1』
2020 7:10
Director | 正木 裕介 (Gallery PARC)
Filme | 麥生田 兵吾
Performer | 今村 達紀

〔2階〕



すべ と しるべ

2020
#01_Murata Chihiro
@ O-eyama Art Site
Gallery PARC

時の容

while it goes

むらたちひろ

Murata Chihiro

会期 10月24日〔土〕・25日〔日〕・26日〔月〕 12時から17時

会場



オーエヤマ・アートサイト
O-eyama Art Site

主催・企画 ― ギャラリー・パルク

協力

オーエヤマ・アートサイト（会場提供）
今村 達紀
江島 和臣 ／ 武田 真彦

* 京都市文化力チャレンジ補助事業

『すべとしるべ』は、2020年6月末にスペースを閉鎖したGallery PARCが、その活動内容を変更して取り組む最初の展示企画であり、現在の社会状況の中にある、展覧会における『つくる・ひらく・のこす』の関係性を検証し、これからに向けた新たな可能性を試行するためのプロジェクトです。

築400年を超える「旧八木酒造」の酒蔵に、むらたちひろ、友枝望の2名のアーティストが滞在・制作し、そこに立ち上がった表現をそれぞれ3日間のみ展示公開するものです。また、公開終了後には、それぞれの展示を記述した映像記録をオンラインにより公開します。

10/24・25・26に展示公開する「時の容 while it goes」では、水を必須とする染織を「時をうつし見るための すべ」と捉える むらたちひろ が、永く水と関わってきた酒蔵に滞在するなかで、場の空気、水や音に触れながら制作した作品により、時とともに現れるもの・揺らぐものを見つめる機会を目指します。

11/14・15・16に公開する「残影の残光 afterglow of vestige」では、インスタレーションを多く手掛ける 友枝望 が、旧八木酒造と土地の歴史、営為や暮らしに内在する重層的な記憶を抛り所に、現在と過去を多重露光のように重ね留める試みにより、これからの未来に向かうための新たな「すべ」を手探りします。

それぞれがこの場・この地で何を感じ、見出し、示すのかはまだ不確かではありますが、現在から続く未知の「これから」において、自身の表現にまず目を向け、その眼差しを再びこの先へと投げかけることで、手探りながらも前に進むためのしるべ（起点）となるのではないのでしょうか。

空間の中、作品の前に立ち、この場の空気を深く吸いこみ、その臭いを感じながら、蔵に流れた営みの時間、ここに滞在した作家の眼差しや手つきを追う。この「体験」はいつしか鑑賞者が自身の視点を獲得することを促し、その眼差しはまた、過去・現在だけではなく、ここからの未来へと投げかけられるのではないのでしょうか。

これから向かう（すべ）を編み直す。

ここから未知への道程に（しるべ）を残す。

これまでもこれからも、この繰り返し。

本プロジェクトはまた、展覧会にまつわる『つくる・ひらく・のこす』という一連を、現在の状況において検証・最適化するとともに、これからに備えた方法（すべ）を開発することを目的とした試行錯誤でもあります。

作家による表現（すべ）を社会に向けてひらく場（しるべ）でもある「展覧会」は、鑑賞者が会場を訪れ、作品の前に立つことではじまる「体験」をともなう場であるといえます。しかし、それは空間・時間を限定することで可能なものであるといえ、それゆえに「展覧会」という出力方法は、現在からしばらくの社会状況に応じた創意工夫が必要であると考えます。

そこで、本プロジェクトでは『つくる・ひらく』のみならず『のこす』こと、とりわけ映像による展覧会の記録について、その在り方や方法を模索します。

これまで多くの展覧会における記録（写真・映像・情報）は、まず事実を残すことを目的に、実際の鑑賞体験を補完する機能を担っていたといえます。しかし、そうした体験が困難となった現在において、この記録が果たす役割・機能にも変化が必要ではないかと考えます。この視点から、本プロジェクトでは、『のこす』記録が「読まれる」時に焦点をあわせ、そこに鑑賞体験と重なる・異なる、新たな何かを『つくる』ことに目を向けたいと考えます。『すべ と しるべ』は、「読み物」としての記録、いわば「記録と記述」の狭間へとより意識的に踏み込むことで、そこにどのような体験を「ひらく」ことが出来るのかについて眼差しを向け、表現がこれからの社会に対応しながら、そこで起動するための術を編み出す機会にしたいと考えます。

制作した映像は展示公開終了後にオンラインにより公開します。

こちらも引き続きご注目ください。

subeshirube

sube_shirube